大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年記念

未来につながる事業

川でつながる　未来につなげる

2021年8月

大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年記念

未来につながる事業実行委員会

１－１.事業方針

（１）目的

ありがとう！大河津分水・関屋分水

2022(令和4)年に大河津分水は通水100周年、関屋分水は通水50周年を迎える。

大河津分水は、水害に悩む越後平野の人々にとって水害から逃れるための切札として熱望され、1700年頃から幾度となく繰り返された請願が結実し、1907(明治40)年に着工、15年の歳月と延べ1000万人の人手を費やし1922(大正11)年8月25日に通水した。

関屋分水は、地盤沈下による浸水が目立つようになった1960年頃から、信濃川による水害から守ること、新潟港の土砂堆積を抑制することを主目的とし、1964(昭和39)年に着工、1972(昭和47)年8月10日に通水した。

越後平野の人々の暮らしを劇的に変えるターニングポイントとなった大河津分水、県都発展の原動力となった関屋分水、2つの分水は今もなお私たちの暮らしを支え続けている。

このような大河津分水、関屋分水が、それぞれ100周年、50周年を迎える機会を踏まえ、信濃川の豊かな恵みに感謝し、先人の偉業を讃えるとともに、大河津分水、関屋分水が地域の皆様により深く理解され、未来につながることを願って『大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年記念未来につながる事業』を行うこととする。

（２）方針

大河津分水・関屋分水は水禍を乗り越えてきた先人達の想いが凝縮した場であり、大河津分水・関屋分水を知ることは郷土愛やシビックプライドの醸成に大きく貢献する。その実現のためには信濃川流域の多くの人々が協力してきた経緯があり、新潟における流域連携の原点でもある。かくして信濃川とその支川・派川は生活用水や農業用水・工業用水など計り知れない恩恵を与えてくれるばかりでなく、親水空間や地域活性化など新しい可能性を秘める場ともなっている。

このように、大河津分水・関屋分水は、郷土を愛し、相互に連携し、未来の100年を考える上で、唯一無二の存在でありこの上ないテーマであることから、分水の歴史を知ること、信濃川流域の繋がりを創出すること、未来の川づくり・地域づくりを考えることを柱として記念事業を実施する。

（３）構成団体

新潟市、長岡市、三条市、加茂市、見附市、燕市、五泉市、弥彦村、田上町、新潟県
北陸地方整備局信濃川河川事務所、北陸地方整備局信濃川下流河川事務所

1－2．事業イメージ

歴史を知る
分水の歴史や信濃川の恵みを再認識する

小学生向け　一般向け

1STステップ　意識情勢・体制づくり

・出前講座
・マーク展開
・パネル展

繋がりを創る
多くの人々が集い参画する

2ndステップ　場やしかけづくり

・川学習冊子の配布
・川のスポット募集
・分水講演会
・自治体誌掲載
・自治体事業と連携
・合同特別展
・業界連携
・メディア連携
・流域連携

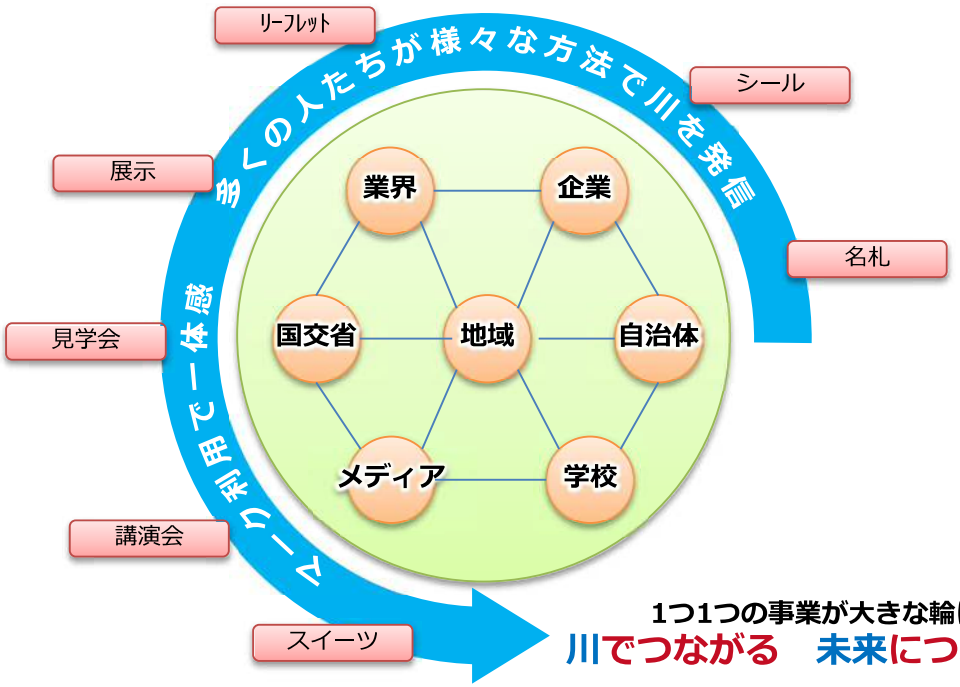
未来を考える
川と社会及び人との関わりを考える

3rdステップ　共感する仲間づくり

・分水サミット
・広報誌発行
・川づくりアイデア募集
・記念シンポジウム
・記録誌の作成

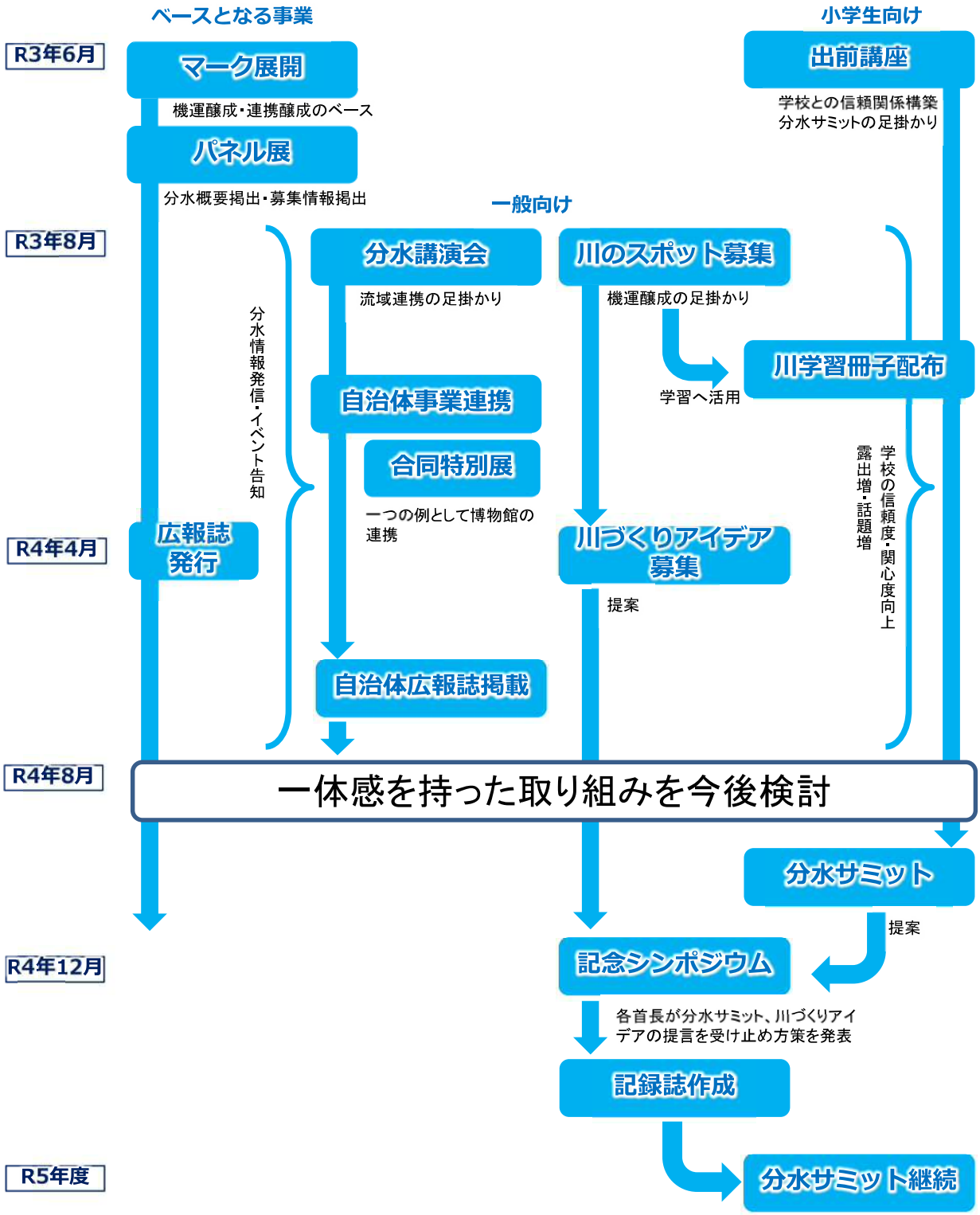
・分水サミットの継続

100年先の川づくり・地域づくりに向けた再出発
流域連携の再構築



1つ1つの事業が大きな輪に
川でつながる　未来につなげる

1－3.事業フロー


ベースとなる事業
小学生向け
R3年6月
マーク展開
機運醸成・連携醸成のベース
パネル展
分水概要掲出・募集情報掲出
出前講座
学校との信頼関係構築
分水サミットの足掛かり
一般向け
R3年8月
分水講演会
流域連携の足掛かり
川のスポット募集
機運醸成の足掛かり
学習へ活用
川学習冊子配布
分水情報発信・イベント告知
自治体事業連携
合同特別展
一つの例として博物館の連携
学校の信頼度・関心度向上
露出増・話題増
R4年4月
広報誌発行
川づくりアイデア募集
提案
自治体広報誌掲載
R4年8月
一体感を持った取り組みを今後検討
分水サミット
提案
R4年12月
記念シンポジウム
各首長が分水サミット、川づくりアイデアの提言を受け止め方策を発表
記録誌作成
R5年度
分水サミット継続

２－１．1stステップ　歴史を知る

（１）出前授業・講座

◎内容：沿川の小学校や公民館を中心に信濃川や大河津分水、関屋分水を学ぶ郷土学習や水害と地域づくりをベースにした防災学習を実施する。講師は国土交通省職員等で担うほか必要に応じて自治体や有識者に協力をあおぐ。実施にあたり、自治体の協力を得たうえで学校や公民館等に出前授業のお知らせを配布する。なお、対応時は歴史冊子等を配布するほか、川のおススメスポットや川との繋がり等の募集事業への応募を依頼する。

（２）マーク展開

◎内容：川づくり・地域づくりを考える契機として、多くの人たちの川への意識醸成と一体感の醸成のため、大河津分水100周年・関屋分水通水50周年マーク等の利用を推進する。名刺や封筒などの刊行物への協力を要請するほか、屋外に掲出する幟旗、卓上に置く幟旗等を作成し自治体等へ配付、集客施設等への掲出を合わせて要請する。

（３）パネル展

◎内容：大河津分水・関屋分水への理解を深めるため、信濃川等の恵みを知るため、また、各種募集事業、リレー講演会やシンポジウム等のイベント情報発信の基地局とするため、自治体の集客施設等にてパネル展を実施する。

２－２．２ndステップ　繋がりを創る

（１）川学習冊子配布

◎内容：横田切れをはじめとする信濃川の水害、大河津分水請願運動、工事の苦労、大河津分水・関屋分水の恩恵等を記した10ページ程度の冊子を作成。各種事業で配布・配信し機運醸成と理解促進のベースとする。

（２）川のスポット募集

◎内容：お勧めの川のスポットを公募し信濃川スポットブックを作成、地域の関心を高めるとともに川づくりアイデア募集へと繋げる。

（３）分水講演会

◎内容：信濃川沿川の9自治体において記念シンポジウムまでに各自治体1回の講演会を実施。講演内容は、歴史、自然、防災、利活用等とし、講師は当該自治体の有識者や専門家を想定する。

（４）自治体誌掲載

◎内容：各自治体の広報誌に記念事業のお知らせや、記念シンポジウムを中心に各募集事業や参集事業等を掲載する。なお、内容は各自治体に関連した事業を中心とする。

（５）自治体事業等との連携

◎内容：既存の事業に大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年のサブタイトルを記載する方法での連携と周知を図る。業界・メディア・地域とも同様の方法での連携を図る。

（６）合同特別展

◎内容：信濃川沿川の博物館等が信濃川・大河津分水・関屋分水をテーマに各館にておいて特別展を実施する。各館の会場冒頭には共通展示として大河津分水の歴史と信濃川の恵みを展示する。連携する博物館は新潟県立歴史博物館、新潟市歴史博物館みなとぴあ、燕市長善館史料館・燕市良寛史料館、長岡市立科学博物館を想定する。

２－３． ３rdステップ　未来を考える

（１）分水サミット

◎内容：大河津分水や関屋分水等を学ぶ子ども達の学習発表会と、川を多くの人たちに利活用してもらうためのアイデアの意見交換会。提言されたアイデアは記念シンポジウム等で各自治体にフィードバックし実現に向けて検討していく。

（２）広報誌発行

◎内容：記念事業を紹介する新聞を作成。水害や工事の歴史、信濃川の恵みの紹介をはじめ、各募集事業や参集事業等を掲載する。

（３）川づくりアイデア募集

◎内容：川の利活用を通じた地域活性化のアイデアを募集し、自治体と連携しアイデアを実現していく。

（４）記念シンポジウム

◎内容：これからの川づくりを考える契機とするためのシンポジウム。各自治体の首長から登壇いただき、分水サミット、川づくりアイデアに対しての考えをコメントいただく。

（５）記録誌作成

◎内容：分水サミット、川づくりアイデア、記念シンポジウムの内容を中心に、大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年事業の記録誌を作成する。

川でつながる 未来につなげる

大河津分水 通水100周年
The Ohkouzu Diversion Channel 100th Anniversary

関屋分水 通水50周年
The Sekiya Diversion Channel 50th Anniversary

大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年記念
未来につながる事業実行委員会